

Anish Kapoor の作品における現代彫刻と展示空間に関する研究

指導教員 加茂 紀和子 教授

LEE CHANG YOON

1. 研究背景と目的

現代彫刻はマルセルデュシャンの《泉》を皮切りに、大きな変化を迎え、その表現技法や材料、規模がより多様化する一方で、展示空間は1936年に登場したホワイトキューブ^{注1)}(以下WC)が現在まで展示空間の基本形として定着している。しかし、WCは絵画作品を壁に効率よく展示するための空間であり、必ずしも現代彫刻に即した展示空間となっていない。

本研究では、国際的に活動しており、現代彫刻家として代表的な人物であるAnish Kapoor(以下AK)の作品を通じて研究を進める。彼は多様な表現技法で様々な大きさの作品を制作しており、作品と展示空間との関係を重視していると考えられる(表1)。AKの作品を対象とし、展示空間の関係とその変遷を調査・分析することで、現代彫刻と展示空間の関係の一端を明らかにする。

2. 研究対象と研究の流れ

本研究はAKの公式HP^{注2)}と作品集^{注3)}に掲載されている言説、スケッチおよび537作品の写真を研究対象とし、以下のように行う。①言説及びスケッチを調査し、作品と空間に対するAKの思想を分析する。②作品の特徴と展示空間要素別に作品を分類し、年代別変遷をみる。③特徴と展示空間要素の相関関係をみるため対応分析を行い、考察する。

3. 言説・スケッチ分析

3-1. 言説分析 言説18件を対象とし、作品と展示空間に対する文章を時代別にまとめた(表2)。1990年代からは作品の場所や観覧者について言及があり、2004年以降からは大きなスケールの作品についての言及が現れた。AKの言説にみられる思想を以下のようにまとめた。①作品は単体ではなく、空間との関係によって成立する<場所性>。②観覧者を作品の一部として捉え、作品への積極的な参加を促している<観覧者>。③作品においてスケールは本質的なものであり、重要である<スケール>。

3-2. スケッチ分析 公式HPにあるスケッチ287点のうち、具体的な形を識別できる259点を取り上げ、分析・考察した。空間から独立して形態を構想する[オブジェ型]と、作品と空間が同時に描かれているものでWC内での作品スケッチを[空間型A]、WC以外でのスケッチを[空間型B]に分けた(表3)。

[空間型A]と[空間型B]を合わせて全体の49%を

表1 Anish Kapoorの代表作

年度/作品名	2004/Cloud Gate	2007/Svayambhu	2011/Leviathan
写真			

表2 Anish Kapoorの言説抽出(例)

年度	キーワード	内容
1990	場所性	The idea of [place] has always been very important to the work. Sculpture has been about physical [space]
2004	スケール	I'm interested in the idea, [scale], is something that is part of meaning.
2007	観覧者 場所性	I am interested in sculpture that manipulates [the viewer] into a specific relation with both [space] and time.
2008	スケール 観覧者	[Scale] is another thing that can entice [the viewer] into the object
2011	観覧者	I'm interested in the way [the viewer] is continually implicated.
2012	スケール	[Scale] is an essential part of the sculpture.
2019	場所性	... They are very sensitive and are affected by the [space] by the cultural metaphoric context of where they are shown.

表3 Anish Kapoorのスケッチ分類例と人の表現有無数

類型	オブジェ型	空間型 A	空間型 B
例			
人あり数	56	23	24
人なし数	77	42	37
計	133	65	61
総計	259		

表4 作品の特徴(例)

思想	特徴	数	図	説明
<場所性>	[設置型]	458		展示空間要素に置かれている
	[一体型]	79		展示空間要素と一体化している
<観覧者>	[鑑賞型]	309		観賞視線・動線が単調
	[体験型]	228		観賞視線・動線が複雑
<スケール>	[一般スケール]	494		高さ4m以下の作品 ^{注4)}
	[巨大スケール]	43		高さ4m超過の作品

占めており、[空間型A]では壁や床のような要素を操作する表現がみられ、[空間型B]では既存空間の場所性を利用する表現があった。また、[オブジェ型]、[空間型]問わず、全体の40%に人が表現されていることがわかった。

4. 作品分類・変遷

4-1. 思想による作品分類と変遷 前章で得た3つの思想に関して特徴を整理した(表4)。さらに、特徴の組み合わせによる8つの類型について年代

LEE CHANG YOON

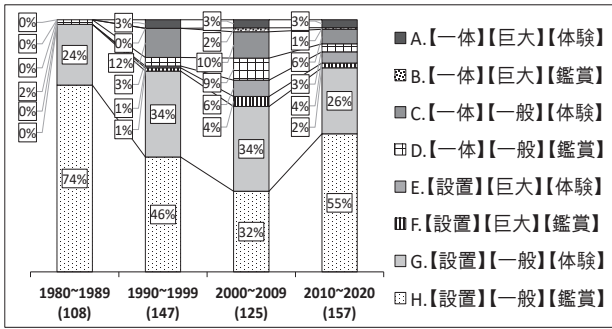


図1 作品の特徴の年代別変遷

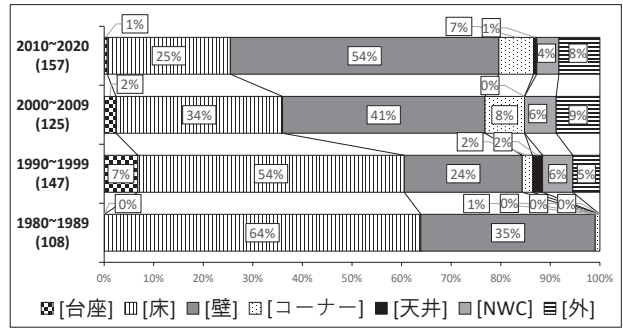


図2 展示空間要素の年代別変遷

表5 展示空間要素による分類

WhiteCube					Non-WhiteCube	外
[台座]/14個	[床]/229個	[壁]/209個	[コーナー]/25個	[天井]/4個	[NWC]/24個	[外]/32個
台座に依存性をもつ	床面に依存性を持つ	壁面に依存性を持つ	コーナーに依存性をもつ	天井面に依存性をもつ	WCではないが室内に展示される	外に展示される

別変遷を示した(図1)。1980年代はH.【設置型】【一般スケール】【観賞型】が7割以上であったが、1990年代頃からは、C.【一体型】【一般スケール】【体験型】をはじめとし、2000年代からAやBなどの【巨大スケール】も現れるようになった。

4-2. 展示空間要素による作品分類と変遷 表5に示す7つ展示空間要素により作品を分類し、年代別変遷を示した(図2)。1980年代では[床]と[壁]が大半であったが、1990年代から[天井]、[NWC]、[外]が現れた。[床]は1980年代の64%から2010年代には25%に減少した一方で、[壁]は35%から54%に増加した。

5. 対応分析・考察

作品の特徴と展示空間要素の関係性をみるため対応分析を行った(図3)。縦軸を「革新-従来」と定義し、AKの作品に3つの類型をみる事ができた。

5-1. グループ1 【一体型】、【体験型】は[コーナー]、[天井]、[NWC]と関係性がみられた。空間要素の操作による作品と空間の一体化は観覧者の対象認識を操作し、多様な視線での作品観覧を可能にしている。したがって、単に作品の形を見せるのではなく、作品への体験をさせている。

5-2. グループ2 【設置型】、【観賞型】、【一般スケール】は[台座]、[床]、[壁]の近くにプロットされた。台座は周辺空間を排除し作品に集中させるものであるため、【一体型】と[台座]は関係性が低いと考えられる。床は空間要素の操作が困難であるため、【設置型】と[床]は関係が強いと考えられる。一方で、壁は操作が比較的容易であるため、[壁]はグループ1近くにプロットされたと考えられる。作品への体験を重要視するAKの作品では【体験型】と関係が低い[床]が減少したと考えられる。

5-3. グループ3と【体験型】 【巨大スケール】は[外]と関係性が強く、他の展示空間要素とは関係

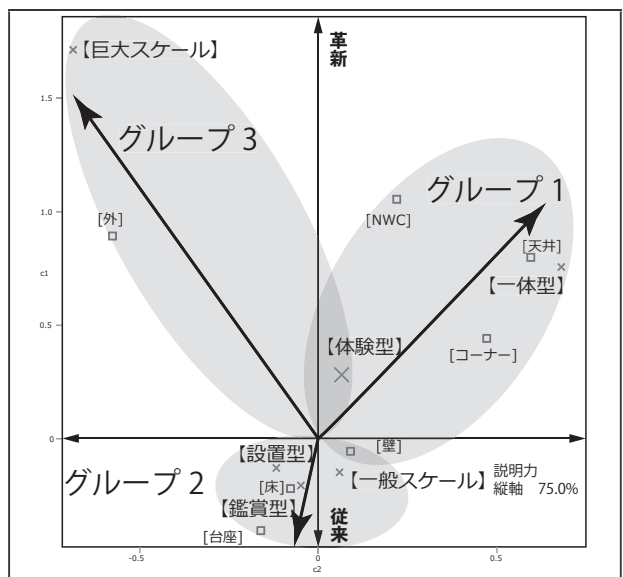


図3 展示空間要素と作品特徴の対応分析 (N=1611)

性が低い。【体験型】はグループ3近くにプロットされているが、それは【巨大スケール】の中に、空間との一体化による【体験型】ではなく、作品自体を空間として認識するほどのスケールによる【体験型】が存在するためだと考えられる。

6. まとめ

本研究ではAKの作品と展示空間の関係の一端が明らかになり、作品の多様化は展示空間の多様化と双方向の関係があることがわかった。汎用性の高いWC自体を否定はできないが、今後も多様化する作品を受容するためには、新たな展示空間が必要だと考えられる。また、NWCという展示空間の可能性を確認し、今後はコンバージョンによる新しい展示空間のありかたについて研究をしていきたい。

【注釈】
 注1) 1936年 Alfred H. Barr Jr が「Cubism and Abstract Art」展示で提唱した展示空間の形式。
 注2) <https://anish Kapoor.com> と Nicholas Baume 『Anish Kapoor: Past Present Future』MIT Press, 2008年
 注3) 597作品(2021.7.18時点)の中から、絵画作品や建築作品などを除いた537作品を選定した。
 注4) 堀内里奈・佐藤信也(2012)、「美術館の展示室における空間構成に関する研究」による世界の現代美術館の平均天井高が5m前後であることを考慮し、高さ4m以下の作品を一般スケールとした。
 【図の引用元】
 ①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫ <https://anish Kapoor.com>